

あり3名死亡とのこと。白岳の登り下りは注意する様にとのこと。道はフカフカの雪が多く歩きにくく。ワカンを付けると具合良くなった。途中山下が疲れたので荷物を持つ。40kg近くなった荷を背負った私はバテバテでBC予定地着。荷上品の発掘は2人なので苦労した。

12月29日（快晴）  
ヘタイム起床3：15～出発5：  
45-白岳7：40～五竜小屋7：45  
-五竜岳9：10～五竜小屋10：20  
-BC12：10（泊）

今日は悪天候になり停滞の予定だったが天気図は意外と良く事実そうなった。暗いなかヘッドランプで進むがここ地理は熟知しているので全く心配なかった。明るくなり山々は静かな朝を迎えた。はるか東方の山から噴煙とおぼしき物が昇っていた。後に分かった事だが、本白根山が幾年か振りに噴火したことだった。

白岳の最低コルで大休止。見上げる白岳、五竜岳、鹿島槍は朝の清冽な光を浴び光り輝いていた。たった2人だけでこんな贅沢をして良いのか？晴天に感謝したかった。ラッセルに苦しみながら白岳

に立つ。昨年とは違ひ静かな山だった。下から登つてくる登山者が見える。五竜岳にはトラバースルートと稜線ルートがあるが後者はパトロール隊にも指摘された。風が出てきた。天気は下り坂の様だ。所々にルート標識の竹を入れて行く。これには赤布がつけてあり「三島芳山」と書いてある。後日、本隊がこれを見て力強く思うことだろう。最後の1本はメッシュもつけて頂上に立てるつもりだった。

非常に細いデリケートな岩稜を越えて肩に達した。夏道はここで合流する。更に急な雪壁を越えて頂上に立つ。山下とガツチリ握手。とうとう冬の五竜岳に立ったのだ。昨年はスッキリしなかっただけにうれしかった。少し雲は出たが、すばらしい展望だった。

特に目の前の鹿島槍の「ヒマラヤヒダ」が何ともいえなかつた。写真を撮り下山。先程の岩稜で後のパーティーガザイルを使用し通過していた。やっぱり悪い所だ。落ちは白岳沢まで数百m飛んでしまう。白岳を越えてコルの先の高台に着く。2人で雪の上に仰向

12月30日（風雪）  
ヘタイム起床6：00～出発9：  
10-テレキャビン11：40～やまや  
-下土狩22：15

12：10～合流15：00～出発16：00  
帰途についた。（文中敬称略）

### 本隊の記録（杉澤康秀）

12月30日

ヘタイム～三島8：20～神城民宿  
やまや14：55（泊）

冬山合宿の出発はいつも慌ただしい。年末の仕事に「ケリ」をつけようとすれば前日は遅くまで装

になつて大休止。雲が流れ、そよぐ風が心地良い。BCには昼過ぎ着く。夜はカレーを作つて食べた。明日の事を相談する。山下は風邪で調子が悪いと訴える。私も明日ここで一日待つのは大変だと思った。29日が晴天でアタック終了したら30日下山を予定に組むべきだと思った。

いろいろ考えたが明日下山する事を決定した。先発隊のリーダーの私が責任を持って決定した事である。

備の点検に追われる。しかし夜行に比べれば朝発はずつとゆとりを感じる。会事務所の空き地で川口さんの8人乗りのワゴン車に装備を満載した上に「大小」の男女8人が乗り込んだ。これはかなりの工夫と忍耐を要する作業であった。車内は人と荷物でギッシリと隙間なく詰まっていたのが、よくしたるもので走っているうちに多少の余裕が出来てくる。途中さしたる交通渋滞もなく積雪によるチーン車が出来てくる。途中さしたる交渉も必要なく、予定より早く神城へ着く。民宿「やまや」では先発隊の後藤隆徳、山下芳広の両名が1日早く下山して休憩していた。彼等にとつては、本隊の我々を驚かすという多少のいたずら心とストッププレー趣味だったかもしれない。「登頂を終えて目的を果たしたのだから、いつまでもBCにとどまる理由はない」とする彼等に、私は合宿の意義や山行前のBCで合流する約束に反することの重大さなどを説く冷静さを失つていった。しかし怒りとして爆発させることは、3年越しの課題である冬の五竜岳登頂を挫折させ、三島芳山の発展にも暗い影を落としかねない。こみ上げる怒りとの斗争